

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 21 日現在

機関番号：14601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520171

研究課題名(和文) 榊源次郎の民族音楽研究活動の再評価：インド及び台湾民族音楽研究の視点を手掛かりに

研究課題名(英文) Re-Evaluating Genjiro Masu's Ethnomusicology Activities: From the Perspective of his Research in India and Taiwan

研究代表者

劉 麟玉 (LIU, LIN-YU)

奈良教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40299350

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は3年間にわたり、第二次世界大戦前の日本で活躍したインド音楽研究者の榊源次郎(1905-1995)の履歴、研究歴を調査し、また、榊の留学先で、インド詩人ラビンドラナート・タゴール(1861-1941)によって設立されたVisva-Bharati Universityの現地調査を実施した。さらに、榊の手元に保管した一資料に基づいて1943年に榊が黒澤隆朝と共に行った台湾民族音楽調査団の調査活動を再考察した。以上の研究活動をふまえて、南アジア地域研究における榊の先駆的立場や、台湾民族音楽調査団における榊源次郎の役割を明白にすることができた。

研究成果の概要(英文)：Genjiro Masu(1904-1995) was a Japanese ethnomusicologist with an interest in Asian music cultures. He was known for a marvelous co-investigation with Takatomo Kurosawa on the tractional music of wartime colonial Taiwan in 1943. This research tried to clear Masu's academic background and career as well as his situation on the investigating group for Taiwanese music. Moreover, we may be able to know about his role and contribution in Asian ethnomusicology history.

During the period of project, we made results as below: 1. According to our field work in India, we confirmed that Masu studied Indian traditional music at Visva-Bharati University founded by Rabindranath Tagore. 2. Through the primary materials that Masu kept in his lifetime, we have found Masu was the real leader when he investigated Taiwanese music in 1943. 3. Through the materials we mentioned above, we have known Masu was a pioneer for studying South Asian music through the way of fieldwork research.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：国際情報交換 榊源次郎 民族音楽学 台湾民族音楽調査団 インド研究 台湾先住民 黒澤隆朝 ラビンドラナート・タゴール

### 1. 研究開始当初の背景

榊源次郎(筆名: 隆哲、1905-1995)は黒澤隆朝(1895-1987)と「台湾民族音楽調査団」を結成し、1943年1月26日に、当時日本の植民地であった台湾に渡り、約3ヶ月の時間を費やして漢民族と先住民の音楽を調査した。その調査は、第二次世界大戦以前の台湾において日本人が行った学術的現地調査としては最大規模のものであった。また、彼が当時の台湾音楽を大量に録音したため、それらは今日に至るまでその時代の台湾音楽を知るための貴重な音源資料となってきた。特に先住民音楽の分野に於いては、蘭嶼のヤミ族を除いてほとんどすべての民族の音楽が録音されているため、先住民音楽研究には不可欠な音声資料である。

その30年後の1973年、黒澤は台湾先住民を調査した当時の資料や録音に基づいて調査結果をまとめて『台湾高砂族の音楽』(雄山閣出版)という著書を出版した。また、翌1974年に、当時録音した台湾先住民の音楽を黒澤編集・解説のレコード集《台湾高砂族の音楽》(ビクター)として発売した。黒澤の著書や彼が編集したレコードの解説(以下「黒澤資料」と称す)からこれまで本研究代表者(劉麟玉)が得てきたイメージは、黒澤が調査団を主導し、榊源次郎は調査団の中で事務的作業を担当したというものであった。

その理由として、以下の数点が挙げられる。すなわち、一、榊源次郎に関連する資料が乏しく、彼の履歴や学術的背景を把握するのに困難であったこと、二、黒澤が調査団の調査結果をまとめ、著書やレコードを通して発信していたのに対し、榊には台湾調査に関する業績がほとんどなかったこと、三、黒澤が日本の民族音楽学界で継続的に学術活動を行っていたのに対し、榊は1960年代以降、表舞台から姿を消したように見えること、であった。つまり、調査団の研究に着手した当時の筆者らの榊源次郎に対する印象は、謎に包まれた、若手のインド音楽研究者であるというものとどまっていた。

しかしながら、「黒澤資料」では、「台湾民族音楽調査団」を結成した経緯について曖昧であり、戦前の雑誌記事の内容では黒澤が榊の「御供をして」調査にでかけたという記述から、榊のほうが主導権を持っていたと思われる。そこで、この研究の初期段階として既刊の出版物を調査し、榊の履歴を含めた考察内容を、「歴史的脈絡下における黒澤隆朝と榊源次郎の交差—台湾民族音楽調査(1943)前後の時期をめぐって』お茶の水音楽論集 徳丸吉彦先生退官記念特別号』(2006:289-300)にまとめた。

2009年、本研究代表者は榊源次郎個人が所蔵していた資料(以下は「榊資料」と称す)を保管している人物、社団法人日本民族音楽協会理事の徳永雅博に会い、榊資料を研究する機会を得た。榊資料は、その量が膨大で、内容も多岐に渡っていた。その中には、戦後の資料もあれば、台湾民族音楽調査団の関連資料、とりわけ榊の自筆調査日記や報告会用原稿などの一次資料も存在していた。また、その中に榊の履歴

に関わる資料も含まれていた。これまでに黒澤資料では確認できなかった資料も多数あり、榊源次郎という人物の全体像を明らかにするために重要な資料であり、また、榊の人物像を明らかにすることによって、日本民族音楽学界における榊の位置づけも可能であると考え、科学研究費を申請するに至った。

### 2. 研究の目的

榊源次郎の履歴と業績は、前述した劉の論文(2006)ではある程度明らかになったが、使用した参考文献には二次文献が多く、『音楽年鑑』や『東洋音楽研究』が中心であった。しかしながら、それらの記事に書かれていることは果たして真実であったのか、検証する必要がある。「榊資料」の一部、とりわけ台湾調査団に関わる資料に触れることで、榊という人物はどのような履歴を持って、なぜ台湾に渡って音楽調査をしようとしたのか、その理由を探るためには、まず榊源次郎の音楽学習歴、研究歴を確認する必要があるため、以下の目的を設定した。

すなわち、インド音楽研究者として第二次世界大戦の榊源次郎の履歴、研究歴を調べ、そして1943年に行われた台湾民族音楽調査団の調査活動を再考察し、同調査団の活動の歴史的意義および南アジア地域研究の先駆的業績を明確にすることである。具体的に次の3点を明らかにすることを目的とする。

(一) 榊源次郎は戦前の東洋音楽学校(現・東京音楽大学)とタゴール大学(現・Visva-Bharati University)に在籍したと参考文献には記載されているが、それぞれの学校では誰に師事し、どのようなトレーニングを受けたのかを解明すること、

(二) 榊源次郎がインド音楽を含め、どのような研究業績を残したのかについて明らかにすること、

(三) 台湾民族音楽調査団が結成された経緯と榊源次郎の団長としての役割を明らかにすること、である。

### 3. 研究の方法

本研究は以下の方法で行なった。

(一) 榊源次郎が執筆した論著の収集および分析考察: 榊の研究および学術活動を理解するために、彼の論文やエッセイをさらに調べる必要がある。具体的に『日印協会会報』、『台湾日日新報』、『東洋音楽研究』、『音楽文化新聞』など第二次世界大戦以前に公刊された定期刊行物の記事や論文を中心に調べた。

(二) 榊源次郎の日本における音楽履歴の調査: 『音楽年鑑』には記載されたものの、記述の正確さを確認する必要がある。榊源次郎の日本における学習状況を確認し、把握するため、東京音楽大学附属図書館に所蔵されている東洋音楽学校の「生徒姓名控」(1926.4-1927.3)を調査した。

(三) インドにおける現地調査: 榊源次郎のインドにおける足跡を調査するため、2012年8

月 25 日から 29 日まで、劉と研究分担者(田中、北田)の 3 名は榎の留学先である Visva-Bharati を訪問し、榎が自分の記事に残した当時の様子を確認し、大学のタゴール資料館・図書館にて調査を行った。

(四) 榎源次郎の一次資料の入手に伴う資料の整理、保存および調査：榎源次郎が生前大切に保管していた資料は、一度日本民族音楽協会に保管され、さらに日本民族音楽協会の解散に伴い、前述した理事の徳永雅博に移管された。その膨大な資料には、台湾民族音楽調査に関連する一次資料のみならず、榎の南アジアに関連する研究や履歴に関わる資料も多く含まれている。研究分担者の梅田を介して共同研究の 2 年次にこれらの資料に触れることが可能となった。これらの資料の内容をすべて把握するには時間を要するものであるが、一次資料を含む保存の作業を優先した。具体的に資料のデジタル画像化およびデータ入力を行い、その作業を田中、仲と梅田が中心に行なっている。また、作業は未完成のため、今後も個人研究の形で継続して行く予定である。

#### 4. 研究成果

上記の研究方法をふまえて以下の成果が得られた。

##### (一) 日本における榎源次郎の学習歴：

東洋音楽学校時代の史料はほとんど残されておらず、生徒名簿も不完全である。しかしながら、榎源次郎が在学した頃の一部の「生徒姓名控」が奇跡的に残っているため、資料調査によって、榎源次郎の東洋音楽学校に在学した状況、日本における学習・師事の状態を確認することができた。上述した資料によれば、榎は 1926 年 4 月にヴァイオリン専攻の学生として在籍し、芝祐泰に師事した。東洋音楽学校には、実技科目のほか、音楽理論や作曲の講義も設けられており、榎源次郎もトレーニングを受けたと考えられる。榎が在学した時期を考えると、実際に民族音楽学者の田邊尚雄(1883-1984)、音楽教育者の遠藤宏(1894-1963)や福井直秋(1877-1963)の授業を受けたと考えられる。そして 1926 年 3 月に 17 回生として東洋音楽学校を卒業した。上記の教員のうち、特に田邊尚雄は榎に与えた影響が大きく、榎の記事には田邊と同じく「実証研究」を行っている」と述べている。

##### (二) 海外における学習歴：

(1) 中国：榎源次郎自身の説明によると、中国留学もした。『日印協会会報』に掲載された榎の記事を総合的に判断すると、榎は 1932 年から 1935 年の間に中国に滞在したと考えられ、1935 年に中国音楽の源を探るためにインド音楽にたどり着いたようである。

(2) インド：榎源次郎が『日印協会会報』に寄稿した記事にはインド音楽研究や Visva-Bharati (榎は「林間大学」「森の学園」と呼んでいる)での学びについて詳細に記述されている。これらの記事を中心に読み込んだ結

果、榎自身が同大学の創始者であるラビーンドラナート・タゴール(1861-1941)について音楽を学び、サンスクリット語を習得し、さらに現地の音楽書を読むほどの語学力を持っていたことが分かった。それらの記事から、榎のインドでの滞在期間や、インドの留学生生活を把握することができる。特に『日印協会会報』63号に掲載されている、「タゴール林間大学の生活」という記事では、榎は一日の学校の流れを詳しく描写し、また、タゴールが授業している容貌や様子を細かく記述している。その場実際にいた榎だからこそ、そのような記事を仕上げるのが可能であったと考えられる。

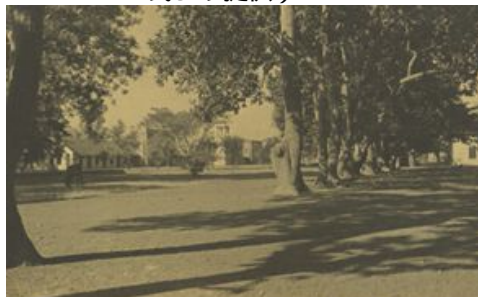
##### (三) インド実地調査の成果：

(1) 写真の入手：2012 年の夏、Visva-Bharati における現地調査を行なった際、『日印協会会報』64号に掲載された榎の記事「タゴール林間大学の生活」(1938: 61-71)に載せられた 2 点の写真が、Visva-Bharati の写真資料室所蔵のものであることが確認でき、榎が Visva-Bharati に滞在した裏付けになる。さらに、榎資料を整理、デジタル化をしている間、幾つかのネガを発見し、それらのネガを現像した結果、榎がインドに滞在したころの写真であることが分かり、そのうちには、複数の楽器の写真も含まれている。榎の音楽文化への眼差しや幅広い関心を窺い知ることができる。Visva-Bharati の写真資料室に所蔵されている写真は次の 2 点である。

写真 1 榎源次郎「タゴール林間大学の生活」『日印協会会報』(1938(63): 66)に掲載されている写真<女生徒達の技楽>(Visva Bharati 写真資料室、Tapan Kumar Basak 氏より提供)



写真 2 前掲榎源次郎「タゴール林間大学の生活」に掲載されている写真<タゴール大学の一部>(Visva Bharati 写真資料室、Tapan Kumar Basak 氏より提供)



(2) 文献の入手：Visva Bharati によって出版された図書のうち、梶源次郎に関する記述が掲載されている文献が手に入った。その文献は *Prasanga Rabindranaath o Jaapaan*(2012, 『ラビンドラナート・タゴールと親交のあった日本人』)と題したものである。梶源次郎の項目の全文は研究分担者の北田によって訳され、その内容は以下の通りである。

「Genjiro Masu

日本の著名なヴァイオリン奏者。1936年の初めに数日間サンギータ・バヴァンに参加した。彼がやってきたのは、インド音楽に関する直接の情報を集める為である。この何人かの生徒も彼のもとでヴァイオリンを習った。後に、彼は再び数日間、シャンティニケトンにきた。1953年のことで、その時、彼は音楽研究所の会長であった。インドは日本の文化的な絆が、どのような仕方ですらに堅固にできるか、ということについて、彼は、その時のヴィシュワ・バラティーの指導者たちとともに協議した」(24頁)

前述したように、梶源次郎が東洋音楽学校に在学中の専攻はヴァイオリンであった。上記の文献を通して、梶がインド留学した際にもヴァイオリンを持参し、Visva Bharati の学生を指導したことが分かった。

(四) 梶資料に含まれている台湾総督府の公文書など台湾資料を考察した結果、梶が台湾民族音楽調査団のリーダーとして台湾に渡ったことが分かった。考察した内容を論文「民族音楽学者梶源次郎再考—日本とインドの間の足跡を辿る」『奈良教育大学紀要』第62巻第1号、97-104頁にまとめた。

(五)

年表の作成：本研究期間中、梶源次郎に関する年表を2つ作成した。その年表は以下である。

梶源次郎年表

劉 麟玉作成

年	月	日	梶源次郎(生没年 1904~1995)
1904	2	4	大阪(市)生まれ。
1926	3		東洋音楽学校卒業。在学中、田辺尚雄に教わった。
1932			中国行き。
1935			インド行き。
1937	4		東洋音楽学会入会。
	9		「印度音楽に就て」が『日印協会会報』第62号に掲載される。
	12		「印度音楽から見た世界の音楽」が『日

			印協会会報』第63号に掲載される。
1938	2	5	東洋音楽学会第7回例会に「印度音楽に就いて」という演題で報告。
	4		「タゴール林間大学の生活」が『日印協会会報』第64号に掲載される。
			5月以前、東京音楽学会入会
	5	5-15	早稲田大学演劇博物館にて東洋劇・音楽芸術展覧会に出品。
	5	7	早稲田大学演劇博物館にて東洋劇・音楽芸術展覧会特設講演会で講演。演題は「インドの劇と舞踊」。
	5	26	京都府教育音楽研究会中等部・仏教音楽協会支部の共催研究座談会で報告。
	6		「印度のトーキー三題」が『日印協会会報』第65号に掲載される。
	7		「印度の楽器に就いて」が『東洋音楽研究』第1巻第3号に掲載される。
	12		『東洋音楽研究』に「在支特務機関の一員として活躍中」と報道される。
1939	12		梶隆哲(筆名)「新興日本支那印度の音楽文化」が『日印協会会報』第70号に掲載される。
1940	7		上旬、蘭印方面の音楽資料を調査。
	8		爪哇(ジャワ)に旅に出た。
1941	8		爪哇から日本へ。
	9	22	「ジャワの劇について」という演題で講演。
1942	2	5	『レコード文化』主催「大東亜の音楽を語る」座談会に出席。『レコード文化』3月号に掲載される。
		5	「大東亜音楽文化圏と其音楽」が『レコード文化』に掲載される。
		5	レコード《大東亜音楽集成》の「第8輯 印度篇上」、「第9輯 印度篇下」、「第10輯 インドネシア篇上」、「第11輯 インドネシア篇下」の解説を担当。
		6	レコード《南方の音楽》の「インドネシアの音楽」の解説を担当。
		10	「南方圏の宗教芸術」『南方の音楽・舞踊』が刊行される。

	10		「ウタノ エホン大東亜共栄唱歌集」 実行委員になる。
	10		共益商社社長白井保男の斡旋によって 「南方音楽文化研究所」が設置される。
	10		常務理事になる。 「音楽文化に見る印度及東印度民族の 人生観」が『日印協会会報』第80号に 掲載される。
1943	1	26	a. 台湾音楽調査のため台湾に滞(5月2 日)
		4	b. 「印度音楽見聞」が『音楽文化』(1 巻1号)に掲載される。
		12	c. 台湾民族音楽調査報告会に出席
1944	7	7	「印度及び南方の民族祭典と音楽文 化」が『音楽文化』(2巻7号)に掲載 される。
1945			秋、榊源次郎が組織した日本民族芸能 研究所では研究発表会が行われた。
1949	12		榊源次郎を含め、今井通朗、岸辺成雄、 吉川英史、瀧遼一、田辺秀雄、林謙三 が集まり、協議し、東洋音楽学会の機 関誌の復刊に働きかけた結果、文部省 の補助金が交付される。
1950	5	28	a. 東洋音楽学会理事。ユネスコとの提 携を担当する。
1951			原稿 “ Investigation report on Formosan folk music : A documentation & theory, with documental records album ” を執筆。 東洋音楽学会理事。
1953	7	9- 15	国際民族音楽舞踊祭に出席。
1954	6	6	東洋音楽学会理事。
1963			編集したレコード《世界民族音楽集成》 がビクターによって発行される。
1995			没

族音楽調査団に同行した録音技師山形高靖が綴  
った自筆日記を翻刻したものがあ。 「論文篇」  
には劉が執筆した2本の論考(1本は『奈良教  
育大学紀要』による転載)を掲載した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には  
下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

劉麟玉 「民族音楽学者榊源次郎再考—日本とイ  
ンドの間の足跡を辿る」 『奈良教育大学紀要』  
第62巻第1号、頁97-104、2013年10月

劉麟玉 「台湾民族音楽調査団」(1943)におけ  
る民族音楽学者榊源次郎の役割の再考』榊源次  
郎の民族音楽研究活動の再評価：インド及び台  
湾民族音楽研究の視点を手掛かりに 平成23  
年度～平成25年度科学研究費補助金研究成果  
報告書(基盤研究(C)、課題番号23520171)』  
(研究代表者：劉麟玉) 頁57-75、2016年3  
月

〔その他(研究成果報告書)〕(計 1 件)

『榊源次郎の民族音楽研究活動の再評価：イン  
ド及び台湾民族音楽研究の視点を手掛かりに  
平成23年度～平成25年度科学研究費補助金研  
究成果報告書(基盤研究(C)、課題番号  
23520171)』(研究代表者：劉麟玉) 2016年3  
月

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

劉 麟玉 (奈良教育大学・教育学部・  
准教授)

研究者番号：40299350

##### (2) 研究分担者

田中多佳子 (京都教育大学・教育学部・  
教授)

研究者番号：70346112

##### (3) 研究分担者

仲 万美子 (同志社女子大学・学芸学部・  
教授)

研究者番号：50388063

(六) 上記の研究過程をふまえて研究成果報告  
書(全75頁)をまとめた。その内容は「資料  
篇：解説および写真資料」、「日記篇」、「論文篇」  
に分け、「資料篇」には榊が残されたネガを現像  
したものを掲載している。「日記篇」には台湾民

(4)研究分担者

北田 信 (大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授)

研究者番号： 60508513

(4)研究分担者 (平成 24 年度～25 年度)

梅田 英春 (静岡文化芸術大学・人文・社会学部・教授)

研究者番号： 40316203